

『朝鮮語学独案内』における仮名音注について

陳南澤*

Kana Transcription of Korean Language in "Chosengo Gakudoku Annai"

JIN Namtaek

要旨

本稿では開化期の韓国語学習書である『朝鮮語学独案内』(1894)におけるハングルと仮名表記から、当時の韓国語の音声・音韻論の特徴を概観する。『朝鮮語学独案内』には、韓国の開化期の教科書や新聞などの文語中心の文献よりも現代韓国語の特徴が多くみられる。本稿では、本書の仮名音注を通して当時の韓国語の音声的な特徴を主に概観するが、本書は語彙の面においても現代韓国語の形成過程を明らかにするのに役立つと考えられる。今後、明治期の他の韓国語学習書を総合的に考察することで現代韓国語の形成過程をより明らかにできると期待される。

キーワード：韓国語、韓国語学習書、仮名音注、開化期、朝鮮語学独案内

1. はじめに

本稿では1894年に東京で刊行された『朝鮮語学独案内』(明治27年)¹⁾に現れる韓国語文とその仮名音注を分析し、19世紀末の開化期における韓国語の音声・音韻の特徴を概観する。明治期に刊行された日本人のための韓国語学習書は、開化期の韓国語の口語的な特徴を表すものが多く、韓国で開化期に編纂された韓国の教科書やハングル聖書、新聞のような文語中心の文献の研究を補うことが出来ると考えられる。

明治期の主な韓国語学習書としては『交隣須知』(明治14年本、明治16年本、明治16年刊 宝迫本)、『校訂交隣須知』(1904)、『韓語入門』(1880)、『日韓通話』(1893)、『韓語通』(1909)などがあるが、『朝鮮語学独案内』は当時の他の朝鮮語学習書と比べて現代韓国語と共通する単語が多く使われており、また仮名音注においても当時の韓国語の発音がよく反映されているという点で韓国語の音韻史において価値を持つ。

先行研究として李康民(2010)では、『朝鮮語学独案内』に関する紹介と他の朝鮮語学習書の構成との比較、幾つかの日本語の特徴を示しているが、韓国語の特徴についてはほとんど分析されていない。

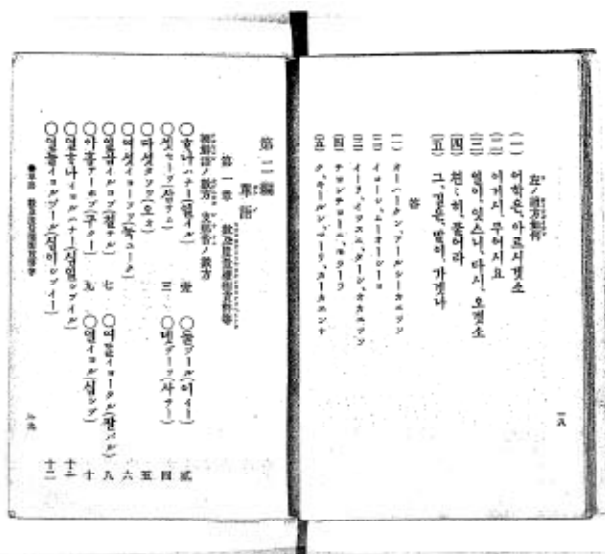
* 岡山大学 言語教育センター

1) 本稿では日本国立国会図書館の所蔵本を分析対象にした。

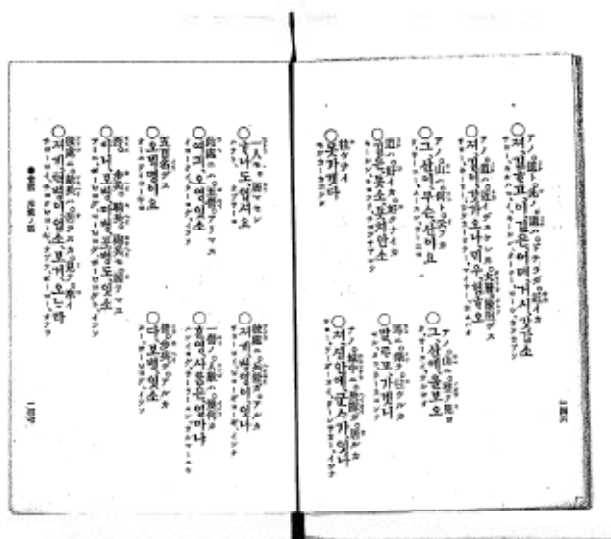
2. 『朝鮮語学独案内』について

本書は1894年(明治27年)12月に東京の「東京築地活版製作所」で刊行された韓国語学習書で、本書の著者の松岡馨についてはあまり知られていない。松岡馨の別の著作である『朝鮮語独習』(1901)は本書と同じ版本である²⁾。

本文の基本構成は次の<図-1>で見られるように「第二編単語」と「第三編助辞」では韓国語単語、その発音(片仮名)、日本語の意味の順に縦に示しており、「第四編会話」では<図-2>のように韓国語の文をハングルで書いて、その発音を左に片仮名で併記し、韓国語の文に対応する日本語を右に記している。



<図-1>



<図-2>

2) この点は李康民(2010)も指摘している。『朝鮮語独習』は1910年に11版が印刷されたが、『朝鮮語学独案内』(1894)から16年間も変更されずに使われていたことは興味深い。

本書の構成は次の通りである。李康民(2010:74)は、他の朝鮮語学習書の構成との比較から、本書は『交隣須知』を基に再構成された可能性が高いと推測している。

<第一編 諺文>

綴字、子音ヲ各音ノ下ニ配合スルノ例、 ㄱヲ各音ノ右傍ニ添ヘルノ例、 重音ノ例、
スヲ諺字ノ左辺ニ添ヘルノ例、 読方ノ例、

<第二編 単語>

数及度量権衡貨幣等、 年月日時等、 天文地理及地名等、 人類、 穀物及蔬菜、 草木及菓実等、
鳥獸魚貝虫等、 身体及疾病、 官位職名、 館舎屋具及庖厨品等、 飲料及食物、 織物及衣服等、
文学及文房具等、 金銀玉石及鉄具等、 舟車及馬具等、 武器及軍用語、

<第三編 助辞>

副詞及代名詞ノ類、 形容詞ノ類、 動詞ノ類

<第四編 会話>

初門、 菓実ニ付テノ話(短話)、 獵夫ノ話(短話)、 魚類ニ付テノ話(短話)、
初対面ノ談(短話)、 草木ノ話(短話)、 穀物ノ話(短話)、 家室ニ関スル話(短話)、
船舶ニ関スル話(短話)、 鉄道ノ話(短話)、 夏日ノ話(短話)、 冬日ノ話(短話)、
霖雨ノ話(短話)、 斥候ノ話(長談)、 歩哨ノ話(長談)、 徵発舎營ノ話(長談)、
兵器及軍事ニ関スル話(長談)、 旅行ノ話(長談)、 飲食物ノ話(長談)、 織物類売買ノ話(長談)

本書に反映されている韓国語の性格について著者の説明はない。また、ハングルの綴りに間違いも多く、韓国人の校閲がなかったと推測されるが、著者の日本語の音韻的な影響が反映されていると思われる間違いも散見される³⁾。また尊敬法の使用も本書の全般部と後半部で異なる点が多く、後半部で間違いが多くみられる。

しかし全体的にみると、本書に反映されている韓国語には当時の他の文献に比べて現代韓国語の特徴が多く見られる。例えば、本書では主題格助詞「은/은/은/는」と目的格助詞「을/을/을/를」が使われている⁴⁾。叙述語尾は「니네다/습네다」が使われている⁵⁾。また「(51) 누임姉、(51) 누우 妹」の例のように慶尙道方言の影響を伺わせる単語もみられる。

3) 例えば次のような間違いが見られる。以下、()内の数字は頁数を示す。

<音節末子音の間違い>

(133) 전가차 停車場 (47) 암록강 鴨綠江 (47) 대둔강 大同江 (48) 두망강 豆滿江 (67) 심하 臣下

<平音と激音の間違い>

(47) 함평 咸平 (47) 춘천 春川 (134) 마차 馬車 (135) 기차 汽車 (58) 피파 枇杷
(134) 이십전 二十錢 (170) 사간경 雙眼鏡 (171) 병양 平壤 (175) 부산 釜山 cf. (47) 부산
(184) 츠려라 > 츠려라 (171) 샷다(=싸다) 罨ンダ

<その他>

(134) 며 切符(=표) (92) 패북 敗北 (116) 범 栗 (48) 회양 ファーヤグ 華陽

4) 『日韓通話捷徑』(1903)では主題格助詞「은/는」と目的格助詞「을/를」が使われているが、「는」の仮名音注は「ヌン」であり、実際の発音は現代韓国語と同様であることを示している。また、『日韓英三国対話』(1892)では主題格助詞「은/는」と目的格助詞「을/를」、叙述語尾「니네다/습네다」が使われている。鄭吉男(1999:131)によれば、開化期の一部の韓国語聖書に「는」が少し現れ、当時の韓国の教科書や天主教関連文献では「는」が一般的に使われた。

5) (135) 덩습네다 暑ウゴザイマス (172) 건너갑네다 渡リマシタ

参考までに、『日韓英三国対話』(1892)では叙述語尾「니네다/습네다」が使われている。

3. 「朝鮮語学独案内」における音注について

本書のハングルには片仮名で音注が施されているが、その特徴を見ることにする。「第一編 諺文」の「第一章 綴字」にはほ次のように「朝鮮語九十九音之圖」が載っている。

<朝鮮語九十九音之圖>6)

		ㄱ	ㄴ	ㄷ	ㄹ	ㄴ	ㄷ	ㄷ	ㄷ	ㅇ
開口音	ㅏ	가 카-	나 나-	다 타-	라 라-	마 마-	바 파-	사 사-	자 ツア-	아 ア-
	ㅑ	가 키야-	나 ニヤ-	다 チャ-	라 リヤ-	마 ミヤ-	바 ピヤ-	사 シヤ-	자 チヤ-	야 イヤ-
咽喉音	ㅓ	거 코-	너 ノ-	더 ト-	러 ロ-	머 モ-	버 ボ-	서 ソ-	저 ツオ-	어 オ-
	ㅕ	거 キョ-	너 ニョ-	더 チョ-	러 リョ-	머 ミョ-	버 ピョ-	서 ショ-	저 チョ-	여 イョ-
舌音	ㅗ	고 コ	노 ノ	도 ト	로 ロ	모 モ	보 ボ	소 ソ	조 ツオ	오 オ
	ㅛ	교 키ョ	뇨 ニョ	됴 チョ	료 リョ	묘 ミョ	뵤 피ョ	쇼 ショ	쵸 チョ	요 ヨ
唇音	ㅜ	구 ク-	누 ヌ-	두 ツ [°] -	루 ル-	무 ム-	부 プ-	수 ス-	주 ツ-	우 ウ-
	ㅠ	규 キユ-	뉴 ニユ-	듀 チウ-	류 リユ-	뮤 ミユ-	뷰 ピユ-	슈 シユ-	쥬 チユ-	유 ユ-
牙音	ㅡ	크 ク	크 [°] ク	트 [°] ツ [°]	르 ル	르 [°] ム	르 [°] プ	르 [°] ス	르 [°] ツ	르 [°] ウ
	ㅣ	기 키	니 ニ	디 チ	리 リ	미 ミ	피 ピ	시 シ	지 チ	이 イ
	·	마 카	나 ナ	타 タ	라 ラ	마 マ	바 パ	사 サ	자 ツア	아 ア

また「第一章 綴字」には、「朝鮮語九十九音之圖」に「ㅎ ㅋ ㆁ ㆅ ㆆ」を加えた別の表もあるが、「야」の音注(イヤ-：ヤー)が異なり、「ㄱ-ㅋ, ㄷ-ㆁ, ㅅ-ㆅ, ㅈ-ㆆ」の音注はそれぞれ同様である。次は「ㅎ ㅋ ㆁ ㆅ ㆆ」の音注である。

ㅎ	ㅋ	ㆁ	ㆅ	ㆆ
하 ハ-	카 カ-	타 タ-	차 ツア-	파 パ-
하 [°] ヒヤ	카 키ヤ-	타 チャ-	차 チヤ-	파 ピヤ-
허 ホ-	커 コ-	터 ト-	처 ツオ-	퍼 ボ-
허 [°] ヒョ-	커 キョ-	터 チョ-	처 チョ-	퍼 ピョ-
호 ホ	코 コ	토 ト	초 ツオ	포 ボ
호 [°] ヒョ	코 キョ	토 チョ	초 チョ	포 ピョ
후 フ-	쿠 ク-	투 ツ [°] -	추 ツ-	푸 プ-
후 [°] ヒユ-	쿠 キユ-	투 チウ-	추 チユ-	푸 ピユ-
후 [°] フ	크 ク	트 [°] ツ [°]	츠 ツ	프 プ
히 ヒ	키 キ	티 チ	치 チ	피 ピ
하 [°] ハ	마 カ	타 ナ	차 ツア	파 パ

次に「第二章 子音ヲ各音ノ下ニ配合スルノ例」では音節末子音について説明し、「ㄱ, ㄴ, ㄷ, ㄹ, ㄴ, ㄷ, ㄷ, ㅇ」が使えるが、「ㄷ, ㅅ」は同じであるため「ㅅ」（正しくは「ㄴ」）だけを使うと記述している。「第五章 ㅅヲ諺字ノ左辺ニ添ヘルノ例」においても「ㄴ」と「ㅅ」を混同しているが、実際の使用例では「ㄴ」を正しく使っている⁷⁾。

「第三章 ㅈヲ各音ノ右傍ニ添ヘルノ例」と「第四章 重音ノ例」では二重母音について説

6) 本書では、「ㅈ」は「ㅈ」と「ㅉ」の間音であり、「ㄱ」は「ㄱ」と「ㄲ」の間音であると説明されている。

7) 「ㄴ」が正しい。実際の使用例では「ㄴ」を正しく使っている。

例) 다 닥 단 달 담 답 닷 당

明している。「第五章 スヲ諺字ノ左辺ニ添ヘルノ例」では濃音に関して、「ㄱ ㅅ ㅈ ㅇ ㅊ ㅇ」に「ス」⁸⁾を添付して一字を成すが、その音調を凝らすのみにして音調を失わないことを説明している。

「第六章 読方ノ例」では、本音を失わないものと本音を失うものを例示している。これはハングル表記と実際の発音の差を表したものである。

	本音	読方
(連音化)		
(16) 국이	クークイ	クーキー
(ㅎの脱落)		
(16) 만히	マンヒ	マーニ
(17) 대단히	タイタンヒ	タイターニ
(二重母音の発音)		
(16) 어데	オートイ	オーテー
(17) 먹겠소	モクコイツソ	モツカエツソ
(17) 동너	トグ ナイ	トグ ネー
(17) 당상이	タグ シャグ イ	タグ サーキ°
(17) 짐석이	チプショクイ	チプソーキー
(激音の発音)		
(16) 그편	クピヨン	クツピヨン
(17) 흥돈오폰	ハントンオープン	ハンドンオツプン
(子音の変化)		
(16) 참판	ツアムパン	ツアンパン
(17) 먹겠소	モクコイツソ	モツカエツソ
(17) 흥돈오폰	ハントンオープン	ハンドンオツプン
(語尾の発音 ⁹⁾)		
(17) 잇덧소 ¹⁰⁾	オットツソ	オツタツソ

3.1. 「・」の表記

本書において「・」と表記されているハングルに対応する仮名音注はすべて「ア段」で音注されており、助詞の場合も「는、을」などは使われていない。また幾つかの語尾に使われている「・」も「ア段」で現れている。つまり「・」はいずれも「ア段」で音注されており、「・」と「ㅏ」は区別されているとは考えにくい。この点は開化期の他の朝鮮語学習書より進歩した点である。次の例は、本書に現われる母音「・」と関わる語彙の一部であるが、「・」はいずれもア段で音注されているため、仮名音注は省略する。

(19) ㅎ나	(19) 여들	(32) 흥들	(40/129) 벚름	(49/133) 사름
(49) 남조	(135) 짚	(126) 쫄	(130) 톱시요	(132) 득러라

8) 「ㅏ」が正しい。実際の使用例では「ㅏ」を正しく使っている。

例) 쓰 ㅏ 쫄 쫄 쫄 쫄 쫄

9) 語尾の「-셔」は「サ」と、副詞(例: 벌써 어셔)の「-셔」は「ソ」と音注されている。

(117) 잇셔도 / (118) 잇샤도 イツサート

10) 「(117) 잇덧게」のハングル表記も見られる。

- (133) 장스빅 (148) 거느려 (163) 늘 (164) 만든 (166) 자세히
 (174) 요스이 (49) 으회 (50) 쫄즈식 (50) 즈식 (59) 득
 (156) 느물 (120) 그러호오

また、中期韓国語で「・」を持っていた語彙の場合も、助詞の「는 를 ㅏ 「・」の音韻変化が反映され、ハングル表記自体が他の母音に変わっている語彙も多い。参考までに、「하다」を「허다」と表記した例は見当たらない。

- (121) 아들 (37) 오늘 (155) 벼슬 (40) 하늘 (40) 구름
 (51) 며느리 (149) 말씀 (136) 어름물 (138) 녀름 (159) 그릇
 (96) 무슨

3.2. 二重母音の表記

二重母音のうち、「ㄷ/ㅌ/·」を含む一部の単語¹¹⁾の仮名音注は単母音化を表している例がみられるが、他の二重母音の音注には単母音化を表す例は現れない。

<単母音と音注表記された例>

- (97) 다른데 タールンッデー (97) 어데 オーデー (97) 이룬데 イーロンデー
 (134) 초흔데 チョーフンデー
 (19) 셋 セーツ (19) 넷 デーツ (128) 여렛소 イヨーレッソ
 (141) 올 세는 オルテーヌン
 (140) 어는째 オーヌンター cf.(173) 어네째에 オノイタイエー
 (21) 일빅 イルペク (21) 이빅 イーペク cf.(21) 빅 パイク
 (44) 읍늬 ウブネー (17) 동늬 トグ ネー

<二重母音と音注表記された例>

- (36) 닷세 タツソイ (37) 옛세 イヨツソイ (37) 어네날 オーノイナル
 (173) 어네째에 オノイタイエー (58) 대츄 타이チュー (38) 새벽 사이ビョク
 (21) 빅 パイク (29) 락년 마이ニョン (63) 빙 파йм

<その他の二重母音の例>

- (23) 훈되 ハントイ (36) 가회날 カーホイナル (41) 우뢰 ウーロイ
 (42) 바위 パウイ (58) 가마귀 카マクイ
 (20) 쇠 슌 (37) 글괘 クルブイ (41) 일괴 イルクイ
 (49) 사나의 サナウイ

3.3. ㅏ+二重母音

「ㅏ+j系二重母音」をもつ単語の仮名音注をみると、次の例のように多くが単母音を表す仮名音注になっている。「第一編 諺文」の「第六章 読方ノ例」においても「당샹이 짐석이」のように発音が変わることを例示している。しかし、「水 슈」を含む単語のように二通りの仮名音注がみられる例もある。

11) 「-데, -째, -빅」などの単語

- | | |
|------------------|---------------------------------|
| (17) 당상이 タグ サーキ° | (17) 짐석이 チプソーキー |
| (45) 서울 ソーウル | (53) 빅성 박크ソグ |
| (46) 슈원 스ーウオン | (41) 홍슈 ¹²⁾ ホングスー 洪水 |
| (42) 호슈 호ーシュー | (55) 슈박 シューバク |

3.4. 頭音法則

本書に現われる語頭の「ㄷ」と前舌高母音の前の「ㄴ」を持っていた韓国語単語のハングル表記と仮名音注をみると、語頭の漢字語における「ㄷ」はほとんど現れず、「ㄴ」になっている例が多く、前舌高母音の前のハングル表記における「ㄴ > ㅇ」の変化は少ない。しかし、前舌高母音の前の「ㄷ」を持っていた漢字語の仮名音注には「ㄴ」の発音がなくなっている例と、残っている例の両方がみられる。

- | | | |
|------------------------------|-------------------|-----------------|
| (58) 니화 イーフアー | (64) 니(齒) イ | (160) 니불 イープル |
| (31) 녀름 イョールム | (49) 냥친 ヤグチン | (120) 닝어 イーゴ |
| (186) 녹식 ¹³⁾ ユクシク | (172) 녹전이 ユクチョーニ | (123) 년화 イヨンフアー |
| (161) 냇적 エツチヨク | (177) 녀녀 イヨムニョ | |
| (53) 니장이 ニーヂャーギ | (49) 녀인 ニョーイン | (51) 령실 リヨグシル |
| (53) 냇반 ニヤグバン | (46) 저녕 チョーニヨグ 鳥嶺 | |

4. 終わりに

本稿では開化期の韓国語学習書である『朝鮮語学独案内』(1894)におけるハングルと仮名表記から、当時の韓国語の音声・音韻論的特徴を概観した。『朝鮮語学独案内』には、韓国の開化期の教科書や新聞などの文語中心の文献よりも現代韓国語の特徴が多くみられる。本稿では、本書の仮名音注を通して当時の韓国語の音声的な特徴を主に概観したが、本書は語彙の面においても現代韓国語の形成過程を明らかにするのに役立つと考えられる。今後、明治期の他の韓国語学習書を総合的に考察することで現代韓国語の形成過程をより明らかにできると期待される。

<参考文献>

- 김완진(1978), 「母音体系와 母音調和에 대한 反省」, 『語学研究』 14-2, 서울대학교 어학연구소 (『音韻과 文字』(1996)에 재수록)
- 김형철(1997), 『개화기 국어연구』, 경남대학교 출판부
- 申昌淳(2003), 『國語近代表記法の 展開』, 太學社
- 李康民(2010), 「1894年刊 『朝鮮語学独案内』에 대하여」, 『日本学報』 第81輯 韓国日本学会
- 박영섭(1994), 『개화기 국어 어휘 자료집』 1卷~5卷, 서광학술자료사
- 유필재(2001), 『서울지역어의 음운론적 연구』 ソウル大学校博士学位論文
- 鄭吉男(1992), 『19세기 성서의 우리말 연구』, 서광학술자료사

12) 「홍슈」が正しい。

13) 「육식(肉食)」が正しい。

- 鄭吉男(1999), 『개화기 교과서의 우리말 연구』, 박이정
- 陳南澤(2010), 「『日韓英三國對話』におけるハングル表記と仮名音註について」 『大学教育研究紀要』 第6号
- (2012), 「『日韓通話捷徑』における仮名音註について」 『大学教育研究紀要』 第8号
- 桜井義之(1974), 「日本人の朝鮮語学研究」 『韓』 Vol.3 No.7
- 山田寛人(1998), 「朝鮮語学習書・辞書から見た日本人と朝鮮語 -1880年~1945年-」 『朝鮮学報』 第169輯
- 小倉進平(1940), 『増訂朝鮮語学史』 刀江書院

<分析対象>

- 松岡馨(1894), 『朝鮮語学独案内』, 国立国会図書館所蔵 (日本)
- 松岡馨(1901), 『朝鮮語独習』, 国立国会図書館所蔵 (日本)